いわかぐみ

令和七年十二月　第百三号

◇ 村の景観と歴史・人物（22）
◇ 民具が語る生活史（民具㉙コケシ）
◇ 方言一考（ぼっこす）
◇ モノいう物（矢じりに残ったアスファルト）
◇ 歴史館行事の報告・お知らせ

村の景観と歴史・人物（22）
上関城主三潴氏の謎②
初代城主は、だれだ？
いつの時代からだ？

渡辺伸栄

三潴氏が上関城主であった証拠探しのタイムトラベルは、江戸時代後期まで遡った。最後の城主三潴左近助から二百数十年も後の証拠文書だが、これで一応の決着。（本紙前号）

では、最初の城主は誰で、いつの時代のことなのか。これが最大の謎。それを引き起こしているのは、『関川村史』の不思議な記述。

『関川村史』（平成四年発行）の謎

日本史の中世は守護・地頭の配置から始まる。『関川村史』（以下、『村史』）の中世編も、関川郷の地頭たちの説明から始めている。

その一人として取り上げた三潴氏の項は、次のように書き出す。（一六七頁）

「鎌倉幕府は筑後国三潴荘（福岡県三潴郡三潴町）出身、三潴左衛門尉を桂関の関史に任命したと伝えられている。」

上関城主三潴氏の存在証明が、この一文で決まる重要な記述。が、出典はない。どこに伝わったのかも書いてない。当地の伝承とも三潴家の家伝ともされてない。裏付けが全くない。

『村史』は、我が村の正史。その記述としては、まことに心もとない。監修者の小村弋先生（新潟大学名誉教授）は本県史学の泰斗。その炯眼をよくもすりぬけたものと、驚くばかり。（肩書は当時、以下同じ）

もちろん、『村史』が作り話を書くはずもない。多分、出典を書かなかっただけなのかもしれない。ではなぜ書かないか、それも謎の一つ。

歴史は物語ることから始まった

歴史は本来、物語だった。数ある過去の出来事の中から、語り継ぐべき先人の辛苦・功業、活躍の足跡が物語られて歴史となった。

しかし、それが行き過ぎれば、真偽混合のドラマになってしまう。そちらの方が人心を引き付け、ともすると史実とされてしまう。

この反省から、先の大戦後、歴史学は科学であることを目指した。科学たりうる所以は史料批判にある。史料の真偽を厳しく検証する。そのために出典、根拠は欠かせない。

科学になったお陰で、新しい史実の掘り起こしが行われ、特に近年、これまでの通説が覆される事態が続々と生じている。権威者によるナラティブが、新進の研究者によるエビデンスによって書き換えられる。これが研究の進歩。

だから現代の歴史研究は、後の批判に耐えうるよう、歴史記述本文中、又は傍注や脚注、あるいは章末や巻末等に、出典・根拠を明示する。しかし、どうしたわけか、『村史』の記述にはそれがない。

ややもすると、伝統的な歴史叙述になじんだ方々は、物語ることに力点を置き、出典根拠を軽んじる。とりわけ、郷土史家にはその傾向があったようで、筆者のような後進の者を悩ませている例を他所でもよく聞く。

このようなことが、出典を書かない理由としてあったのではないだろうか。

三潴左衛門尉説は、どこから出てきた？

『村史』の三潴左衛門尉来任説には、元版（ネタ元）があった。『村史』発行の二十一年前、昭和四十六年作成の『関川村上関城跡緊急発掘調査報告（付　三潴氏の活動と系譜）』と題した小冊子（以下、『報告書』）。ここに、三潴左衛門尉が登場

する。

まず、加藤元吉先生(村教育長)執筆の「はしがき」に、名字だけで予告登場。

「義経が奥州の藤原氏をたよって東下りのとき開かれた検問所がここ上関の地に設けられ、追捕使に筑後国三潴庄出身の三潴氏が任命されこの地に赴任された。」

なんとまあ、『村史』の記述をはるかに超越している。しかし、例によって出典・根拠はない。いったいどこから引っ張ってきた記述なのか。

この疑問の答えは、『報告書』本文に掲載の高橋重右エ門先生(村上高校教諭)執筆「上関の立地」と題した小論中の次の文章で明らかになる。

「故斎藤秀平氏は文治元年(一一八五)源義経が兄頼朝と不和になって東下りのとき、検問所がここに開設され、三潴庄出身の三潴左エ門尉が関郷地頭として来任したとしている。」

三潴左衛門尉来任説の出処は、斎藤秀平だった。がしかし、またもや、出典はない。そもそも出典を書くしきたりなどなかったようだ。

文治元年説は消えた?左衛門尉は残った?

斎藤秀平は、昭和三十年代に『新潟県史』鎌倉時代編・上杉時代編・江戸時代編全五冊を執筆発行された郷土史の大家。

この書物は編年体で、年月日ごとに出来事を出典史料と共に明示し、それに対する自分の論考はそれとして明確に書き分けている。労作であり名著、郷土史研究の必読書。

もう十五年以上前になるが、筆者も鎌倉編と上杉編の二冊は目を通し、当地域に関係する内容はメモにとった。しかし、左衛門尉来任説が書いてあった記憶も記録もない。今一度、手元の鎌倉時代編を確認したが、やはりない。

もちろん、斎藤は、『新潟県史』以外にも、様々論文を発表しているので、そのどれかに左衛門尉来任説があるのかもしれない。そうだとしても、謎は、始めの『村史』の記述に、もどってしまう。

斎藤秀平の左衛門尉来任説が確かなのであれば、『村史』の記述も『報告書』と同じにすればいいはず。『村史』中世編の執筆も高橋重右エ門先生なのだから。それがなぜ、あのような出処不明の「伝えられている」などという書き方にしたのか、まったくもって摩訶不思議。

このミステリアスな事態は、『報告書』後段に記載の横山貞祐先生(国士舘大学助教授)執筆「三潴氏の活動について」の論述で、一層霧と闇に包まれる。次のように書いてある。

「三潴が(中略)和田義茂―重茂―時茂―兼茂―茂長のいつの代に上関郷に居住するにいたったか、明らかでない。」(筆者注：和田義茂以下の人名は奥山荘地頭和田氏代々の当主、茂長からは黒川氏を名乗る。)

『報告書』の前段に高橋先生が斎藤秀平の文治元年三潴左衛門尉来任説を挙げてあるにもかかわらずの、この記述。いつ来たかわからないと。横山先生は文治元年説を否定した。いや、そもそも左衛門尉の名も無視。

それがあってか、高橋先生は、二十年後の『村史』では、例の桂関来任伝の数行後に「しかしいつここに来任したかは明確ではない。」と書いた。でも、なぜか、あえて左衛門尉の名は残した。

さてはて、斎藤秀平の文治元年(一一八五)説は、いったいどうなってしまったのか。『新潟県史』の書きぶりからすると、斎藤秀平という人は、出典が確かなことしか書かないはずなのだが。

さらに不思議なことに、斎藤、高橋、横山の三者は、最初の三潴氏が九州三潴から来たことでは一致している。何が根拠なのか。そして、なぜ、はるばる上関の地までやって来たのか。

中世史は謎だらけ。謎を暴くのは推理小説マニアの秘かな楽しみ。つづきはまた三か月後。

上関城跡発掘の出土品

民具が語る生活史 ㉙コケシ

秋の美術館巡りでは福島市にあるコケシの博物館、「☆1原郷(げんきょう)のこけし群　西田記念館」を訪れました。館は聖アンナ教会を中心としたアンナガーデンの敷地にあり、西田峯吉のコレクションを中心に約1万本のコケシを収蔵し、常時千体ほどを展示しています。西田は島根県出身で大正14（1925）年から農林省の役人として蚕糸業に関わり、東北各地を巡りました。訪れた地でコケシと出会い、生涯を通じて収集と研究に励んだといいます。

民具大辞典によるとコケシは「木材を轆轤(ろくろ)で挽き、描彩を施した人形。円筒状の胴に球状の頭部がつくが、手足はない。東北地方固有の人形で、蔵王山(宮城・山形県)や栗駒山(岩手・宮城・秋田県)周辺を中心に江戸後期以降に作られるようになったと推定される。こけし作りは、轆轤を使って盆や椀などを作る木地師(木地屋)の副業であった。もとは子どもの玩具であったが、湯治客相手の土産物として売られるようになり、大正期頃から民芸的な美しさに惹かれた愛好者が増えて、今日では大人の鑑賞品となっている。(後略)」と説明されています。(P.202-203『日本民具事典』)さらにコケシ作りの条件として、工人である木地屋の存在、原木（マユミ、クルミ、シラカバ）の豊富さ、近くに消費地があることを挙げています。

コケシの主な産地は、土湯（福島県）、稲子・横川・新地・弥次郎・鳴子（宮城県）、山形（山形県）、木地山・川連（秋田県）、温湯・大鰐（青森県）です。これらの産地には近世以降福島県会津地方から北へ移動し、定着した木地師が多かったようです。そして産地に共通するのは湯治場に近いことです。木地師は湯治場の近くに住み、旅館で使う食器類や湯治客の土産物として、膳・椀・盆・木地玩具などを作っていました。コケシは轆轤で挽きやすく、形が比較的単純なので、はじめは練習用として作られていたようです。明治以降食器が陶磁器へと変わっていくと木製食器の需要は減少していきます。その結果、コケシを専門に作る木地屋が多くなっていきました。明治末頃にコケシは全盛期を迎えたということです。

コケシは、土湯系・中ノ沢系・鳴子系・作並系・遠刈田(とおがった)系・弥次郎系・肘折系・山形系・蔵王系・南部系・木地山系・津軽系の十二の系統にわかれるそうです。産地それぞれで編み出され、受け継がれた模様や髪型などに特徴がみられます。コケシの伝統的な作り手は「工人(こうじん)」と呼ばれ、展示されているコケシにはそれぞれの工人の名前が記されていました。参加者は、「家のコケシはどのコケシだろう」、「これからコケシを見る目が変わる」など、興味深く観覧しておられました。

近年は「第三次コケシブーム」といわれ、コケシ好きの女性を指す「こけ女」という言葉もあるそうです。創作こけし・新型こけしという分野では、ムーミンやミッフィー、ゲゲゲの鬼太郎のコケシも制作されています。

山陰地方出身の西田峯吉には、東北の民俗・民芸が珍しく映ったのでしょうか。時代としては合っているものの、西田と☆2民藝運動の関係はわかりませんでした。ただ、コケシ産地には柳宗悦、河井寛次郎、芹沢銈介らが訪れたといいます。

今回はコケシを見てきましたが、村上の大浜人形、水原の三角だるま、巻の鯛車、新発田の金魚台輪などの身近な地域の民芸品、郷土玩具の由来や変遷も興味深いです。また、今後視点を変えて「お土産」についても考えていきたいと思います。

☆1原郷は造語です。「西田氏のこけしに対する思いを表現した言葉で、心に郷愁を呼びおこすようなこけしを「原郷のこけし」と呼んでいます」と説明がありました。☆2民藝運動は、大正15（1926）年に柳宗悦・河井寛次郎・浜田庄司らによって提唱された生活文化運動で、それまで重要視されることのなかった日用の雑器に美的価値を見出そうというものです。

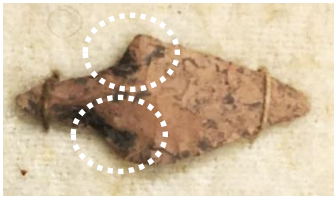
文献 日本民具学会編1997「こけし」『日本民具事典』ぎょうせい、福田アジオ編1999「こけし」『日本民俗大辞典』吉川弘文堂

方言一考・ぼっこす

「ぼっこす」は「ぶっこわす」という意味の方言。「ぶっ倒す」「ぶっ飛ぶ」のように「ぶっ(ぶち)」は勢いよく何かする様を表す接頭語である。その「ぶっ」が「ぼっ」に、「こわす」が「こす」に短縮転訛したのが「ぼっこす」という、意味とは裏腹な、チョコのような甘い響きの方言である。「ぶ」というウ段の音が「ぼ」というオ段の音に変化する例は他に、「縫う」「のう」、「むくどり(椋鳥)」を「もくどり」などがある。市街地では騒音が問題になっている椋鳥、歴史館に止まり木にように立ち寄っていかれるK氏も、椋鳥のように声高に喧しく喋って去っていく。この一人椋鳥と言うべきK氏、心臓がぼっこれかけて第二の心臓を入れているからか、ぼっこれて使われなくなった物に執着、愛着を抱き、拾ってきては直す器用さがある。つるを直した薬缶や穴を塞いだ鍋などを山で自慢げに見せて、それで料理を作ったりもするが、お世辞で褒められるのが関の山だ。そんな物が家の中に山積して、これが伴侶とのいざかいの元になり、亀裂が入る。勝手に捨てられて憤慨して、部屋に籠って自分で片付けようとしても、これは使える、これは大事だと、選択の幅が広いから、無意味に一日が過ぎて、こんなことなら芍薬園で草取でもしていた方が良かったと、虚しく夜を迎えることになる。(安久)

モノ言うもの・矢じりに残ったアスファルト

写真は縄文時代の矢じりで、歴史館の初代館長高橋重右ェ門氏が少年の頃、近くの畑で拾い集めた物の一つです。敏捷な小動物を獲るための弓矢の先に付けた矢じりは、この時代の代表的な遺物で珍しい物ではありませんが、少年が欣喜雀躍したのは、その一つになにやら黒い物が付着していて、石油の一種アスファルトだと気付いたからです。アスファルトは粘着性の高い物質で、現在では舗装などに使われますが、縄文人はこれを矢と矢じりの接合に使っていた！少年の大発見です。この感動こそ郷土史家としての出発点であったかもしれません。その後戦役に服し、戦後は教育者として人生を歩みました。とある時、大事な宝物、例の石器を某大学の先生に見せると「どこから産したアスファルトか成分分析をしたい」と言うので貸したところ、戻ってきた時には、矢じりに付いていた黒い塊はきれいにこそぎ落とされていたそうです。少年の大事な思い出、小さな夢も一緒に削ぎ落とされたいう悲しい話です。(安久)



黒い部分がアスファルトの跡。「アスファルトが付着した矢じりの出土例は決して珍しいことではない」と私が言えば、当時の先生は更に落胆なさったことでしょう。

歴史館行事の報告

○秋の美術館巡り ①酒田市立美術館「花房さくら木彫展まるごとぜんぶ、猫?!」・加茂水族館
10月11日(土)・参加者19名
②福島県立美術館「生誕140年竹久夢二のすべて」・西田記念館
10月18日(土)・参加者23名

○歴史講座②③ 講師：関川村歴史文化財調査委員 佐藤忠良さん ②10月22日(水)『七、九ヶ谷の歴史』から学ぶ」、③11月12日(水)「岩船地域の寺院」を行いました。**○山城を訪ねて・秋の部「岩室天神山城址」**11月8日(土) スタッフ・参加者20名**○古文書解読講座(10～12月)**平田甲太郎文書を読んでいます！

お知らせ

○「新春書き初め作品展」会期：1月4日(日)～2月1日(日)、10時～16時、月曜休館・月曜祝日の場合は翌火曜休館、観覧無料。

○「山と花のスライド解説会」1月18日(日)、13時30分～15時30分、歴史館映像ホール。

○年末年始の休館日 12月29日(月)～1月3日(土)です。良いお年をお迎えください。

いわかがみ 第百三号
発行日 令和七年十二月
編集発行 せきかわ歴史とみちの館
tel0254-64-1288 Fax0254-64-0300